

公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会
第8回メディア委員会

1 開催日時：平成30年1月22日（月）14時00分～15時30分

2 開催場所：組織委員会虎ノ門オフィス9階TOKYO

3 出席者

メディア委員（五十音順）

日枝委員長、石川副委員長、安藤委員、池田委員、石井委員、笛吹委員、北川委員、
狐崎委員、小杉委員、今野委員、齋藤委員、佐藤委員、佐野委員、関根委員、東実委
員、中屋委員、夏野委員、樋口委員、檜原委員、福地委員、藤丸委員、前川委員、丸
山委員、宮嶋委員、本橋委員、山田委員、結城委員、豊委員、栗原氏（草野委員代
理）、野村氏（小菅委員代理）、小林氏（平委員代理）、仙石氏（西野委員代理）、
山崎氏（村岡委員代理）、並河氏（吉田委員代理）

臨時委員

多田氏（内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局 企画・推進統
括官）、越氏（東京都オリンピック・パラリンピック準備局計画調整担当部長）

組織委員会事務局

森会長、坂上副事務総長、中村企画財務局長、小林広報局長、高谷スポークスパーソ
ン、谷内広報担当、手島総務局長、井川総務次長、坂牧マーケティング局長、小林企
画制作部長

4 議事次第

【議題】

(1) 東京2020大会の準備状況について

(2) 東京2020参画プログラムの現状について

(3) 小・中学生からのポスター企画について

(4) 1000 Days to Go! の取組について

5 配布資料

資料1 東京2020大会の準備状況

資料2 東京2020参画プログラムの現状

資料3 小・中学生からのポスター企画

資料4 1000 Days to Go !の取組

6 議事録

○日枝委員長 皆さん、お忙しいところ、また雪の降る中、多数お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。ただいまから東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の、第8回メディア委員会を開催いたします。

遅ればせながら、新年あけましておめでとうございます、本年もよろしく願いいたします。

初めに、本日の委員会のメディアへの公開について、お知らせいたします。

前回と同様になりますが、会議の冒頭のみオープンとさせていただきたいと思います。

それでは、開会に当たりまして、森会長から御挨拶をお願いしたいと思います。

○森会長 あけましておめでとうございます。遅ればせになりますが、御挨拶を申し上げます。

新しい年になりまして、東京オリンピック・パラリンピックに向けて、ますます機運を醸成していく段階に入っております。特に、子どもたちへの関心をできるだけ深めていこうということで、子どもたち、参画へのレガシー創出という観点からも、とても重要なテーマを扱っていただいております。初めて、マスコットを全国の小学生に選んでいただく、このようなことを行っております。

2月末には投票の結果を発表する予定でありますので、ぜひ、関心を持ってもらって、この子どもたちが2月22日にどういう形で選ぶだろうかという、選考の情報を、中間報告、あるいは出口調査の、あれぐらいのムードを盛り上げていきたいものだなと今、思っておりますので、メディアの皆さんにもぜひ、大いに御関心を持っていただきたいと思います。

まず、皆さんにも御協力をいただきまして、小・中学校からオリンピック・パラリンピックをテーマにしましたポスターを募集いたしました。国内外から約1万4,000点の応募がございました。本日はメディア委員会の皆様に最終選考の御協力をいただき、本当にありがとうございます。3月末には有明のパナソニックセンター東京で表彰式を実施いたしますので、ぜひ、またその節、お足を運んでいただければと思います。

そして、今申し上げましたマスコットをテーマに、来年度のポスターの募集を予定いた

しております。

復興の取組といたしまして、第5回IOC調整委員会で公式夕食会を行いました。東日本大震災で被災いたしました岩手、宮城、福島県の3県の知事さんにおいでいただきまして、公式夕食会には、この3県からできました農産物あるいは生鮮食料品をもとにしていただいて、調理をしていただきました。非常に好評でありまして、それぞれ3県のお酒も全部持ち寄っていただきましたし、知事さん自身がウエイター役をして、調整委員の皆さんにサービスしておられるということで、復興への取組の何かのお役に立てばなと思っております。3県の知事の皆さんが来られて、コーツ委員長を初め皆さんに、お互いにお話をしながら、食料品等についての、あるいは危険なものはないか、いろんなことのやりようをされておられます。

先ほどちょっと触れましたマスコットの選考も全国2万の小学校の中から、もう既に1万3,000校を超えたというので、当初の出足はあまり関心がなかったんですが、これはメディアの皆さんの扱いが、物すごく大きく扱っていただいたものですから、大変多くの子どもたち、学校や教育委員会が無視をしていますが、子どもたちが、なぜ僕たちはやらないんだよということになって、そのことがどンドンどンドン広がりを見せていって、1万3,000。お正月の格好の家庭での話題でもあったし、学校でも大変な話題になっています。

これはぜひ、2月22日に成功裏に選びたいと、こう思っておりますので、御協力を賜りますよう、お願いを申し上げます。

いよいよ、あと900日余りになりました。これからは、また皆さんにはお知恵をいろいろおかりしたいと思いますが、直接、国民に直結したことが、たくさん決められてまいります。

例えば、チケットの販売もそろそろ始めるということになっております。ワールドカップは1年前にやりますから、ラグビーはもう販売をいたしておりますが、物すごく問い合わせと、申し込みが多いようです。そういうことを見ますと、オリンピックのことを想像すると、もっともっとこれは、全国に火がつくんじゃないかなというふうに思います。

さらには、これも御関心が多いと思いますが、リレーの地域の選定も、春から夏にかけて、聖火リレー検討委員会で大体、決めるということになっております。

さらには、ボランティア、これも最大の問題でありまして、8万人、ボランティアの募集を開始いたします。そして、最大の、全ての問題が大変大きな問題であります。オリンピック・パラリンピックの四つの、開会式と閉会式、合わせて四つになりますが、これ

を私ども組織委員会では、起承転結というふうに名づけて、東京2020 開会式・閉会式 4 式典総合プランニングチーム8人を決定しまして今御検討いただいておりますが、これもますます話題が盛んになってくるのではないかというふうに思います。

いずれにいたしましても、本当にこれまではどちらかという基礎工事を一生懸命にやってきた組織委員会でございますけれども、これからはいよいよ、幸い、山の頂の雲も切れて、山頂も見えてまいりましたので、なお一層努力して、国民に直接触れることをこれからやっていかなきゃならんと思いますので、ますます皆様の御指導や御鞭撻をいただかなければならない、大事な段階かと思っておりますが、どうぞ、委員会の皆様にもよろしく御協力いただきますようお願い申し上げます。開会の御挨拶といたします。どうぞよろしくお願いいたします。

○日枝委員長 森会長ありがとうございました。

まず、今、森会長からもお話がございましたけれども、委員の皆様におかれましては、今年も小・中学生から募集したポスターの選考に御協力をいただきまして、誠にありがとうございました。

今年はテーマが「～知ろう！観よう！応援しよう！～東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に抱く私の夢」ということで募集いたしましたけれども、子どもたちの大会に向けた大きな希望を感じる力作ぞろいで、数点に絞るのは大変だったのではないかとこのように思っております。後ほどの議事の中で、応募状況の詳細や表彰式の予定などを事務局から報告をさせていただきたいと思っております。

後日、皆様からの投票を集計し、表彰作品が決定いたしましたら、皆様に改めて報告をさせていただきたいと思っております。

また、復興に向けた取組では、昨年6月に開催いたしました、ワーキンググループの中で、委員の皆様から御意見をいただきました、メディア委員会のワーキンググループが東京を出て、被災地で開催し、現地からの発信をしようという案について、今、事務局において調整を行っているところでございます。時期は来年度中になる見込みでございますが、開催の折には、ぜひ皆様の御協力をお願いしたいと思います。

さて、本日のメディア委員会では、直近での東京2020大会の準備状況、小学生によるマスコット投票の状況など、東京2020参画プログラムの現状や1000日前にちなんだ一連のイベントの実施結果などについて報告をさせていただきます。

組織委員会といたしましては、より多くの国民に大会に参画してもらう仕組みを考えて

いるところがございますが、さらなる盛り上げ、人々の参画をつくり出すためにどうすればよいかなど、ぜひとも皆様の活発な意見をいただければと思っております。

次に、メディア委員の変更について、お知らせ申し上げます。

お手元の資料1のメディア委員会名簿に記載のとおり、2名のメディア委員が人事異動などで変更になっております。名簿順に一人ずつ呼びいたしますので、呼ばれました方はその場でお立ちいただければと思います。

日本経済新聞社編集局運動部編集委員、北川和徳委員。

また、本日は御欠席のため代理出席をいただいておりますが、一般社団法人日本新聞協会専務理事・事務局長、西野文章委員でございます。

○仙石様（西野委員代理） すみません、西野、今日ちょっと所用のため出張しております、かわりに私が参りました。

○日枝委員長 以上のお二人に新たに加わっていただきます。新委員の皆様、今後ともどうぞよろしく願いいたします。

また、本日は臨時委員として2名の方をお迎えしておりますので、御紹介いたします。

内閣官房東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局企画・推進統括官、多田健一郎委員。

東京都オリンピック・パラリンピック準備局契約調整担当部長、越秀幸委員。

どうぞ、よろしく願いいたします。

最後に、事務局についても交代等がありましたので、御紹介申し上げます。

東京2020組織委員会広報局長、小林麻紀さんでございます。

東京2020組織委員会スポークスパーソン、高谷正哲さんでございます。

東京2020組織委員会会長事務総長付広報担当、谷内順二さんです。

○日枝委員長 それでは、組織委員会事務局からの説明をお願いしたいと思いますが、前回に引き続き、今回の委員会でも全ての議題について、まず事務局から御説明させていただき、その後、委員の皆様からも御意見をいただければと思います。

では早速ですが、資料に沿って、東京2020大会の準備状況について、東京2020参画プログラムの状況について、小・中学生からのポスター企画について、1000 Days to Go!の取組について、それぞれ事務局から御説明を願います。それでは中村さん、お願いします。

○中村CFO ありがとうございます。

それではお手元、資料1と書かれたものを御覧いただけますでしょうか。お持ち帰りやすいように、全てを一つの資料にとじております。

目次のところに書いてありますが、ONE TEAM PROJECTと日本の木材活用リレー、1000 Day to Go!、開閉会式、公式夕食会、平昌での広報活動、Road to Tokyo 2020ということでございます。多くの方に参画いただけるような取組を組織委員会は幾つもしております、そういったものを中心に御説明をしたいと思っております。

おめくりいただきまして、ONE TEAM PROJECTでございます。こちらは去年の春に理事会で、理事でおられる秋元理事と蛭川理事の御発案で、いろんな、日本にいらっしゃる、いろんな、各界の有識者であるとか、若く才能を持った方々に、一言一言、2020大会に向けたメッセージを出してもらって、そういうものをリレー形式で出すと盛り上がりができるんじゃないかと。組織委員会だけが大会の意義をPRするのではなくて、いろんな方を巻き込んだほうがいいんじゃないかという御発案で、それでは両理事の音頭のもとで、いろんな方にお声かけしようということで始まったものでございます。

第1弾が海老蔵さんのプロジェクト、8月24日からでございます。これは皆様、ブログ等で海老蔵さん自身も御紹介していただいたということで御覧になった方もいらっしゃるかと思いますが、この写真にありますとおり、歌舞伎のいでたちで、2020年、3年前が来たので、これからみんなで頑張っていきましょうと。最後は「ずずいー」というところまで、歌舞伎調でやっていただいたということで、非常に話題になりました。

ここにありますように、3日間でYouTube再生回数が20万回突破であるとか、あるいは、いわゆるランキングで1位をとったりということで、非常に注目を浴びて、よいスタートになったと思っております。

その後も、ここにありますとおり、野村萬齋さんと空手の清水選手。

あと、X JAPANのYOSHIKIさんとノーベル賞の山中先生。

あと、高橋陽一さんというのはサッカーの翼くんですね、「キャプテン翼」の作者の方への特別インタビュー。

あと、エンブレムをつくっていただいた野老さんと、日本画家の松井冬子さんの対談の動画。

そして、ちょうど「西郷どん」が今、始まっておりますけれども、原作者の林真理子さんと、西郷隆盛役の鈴木亮平さん。

これは、たまたまなんですかね。そういうふうには。

○小林部長 あえて。

○中村CFO あえてやったわけですね。そういう朗読のようなもの。これも先週オープンにしまして、これも、もう数万、YouTubeで視聴されているということで、話題を集めております。

また、今後でございますけれども、今、宇宙ステーションで、宇宙に行っている金井さんから何らか、今いろいろ仕込みをしておりますけれども、宇宙からメッセージをしていただくというようなことも考えております。

こういったことで、いろんな角度から2020年についてメッセージをいただいて、盛り上げようという企画を進めているところでございます。

二つ目が、4ページ目でございます。これも去年の、1年かけてやっておったプロジェクトでございますけれども、選手村に選手が集まるビレッジプラザというのがございます。この写真の右側になりますが、そのビレッジプラザの木材は、全国の自治体から木材をお借りしてつくと。お借りしてつくったものを、またお返しして、その木材でそれぞれの各自治体の、例えば幼稚園であるとか、公園のベンチであるとか、養護の施設であるとか、そういったところに使っていただくということができないかという企画でスタートしたものでございます。

秋に締め切りましたところ、42事業協力者、一部共同のところがございますので、自治体の数としては63自治体を決定いたしました。昨年そのお披露目の場を設けさせていただきましたけれども、こういったところで、自治体の方々もこの選手村のビレッジに参画していただくというようなことも取り組んできたところでございます。

おめくりいただきまして、5ページ目でございます。1000 Day to Go!でございますが、これは、後ほど広報局から具体的な説明をさせていただくので詳細は割愛いたしますけれども、やはり、いろいろ報道ぶりなども、私の目から見ておりましたも、秋の1000日前を境に、いよいよ大会が始まるんだなということで、機運が非常に高まっておるのではないかとこのことを肌で感じております。やはり、カウントダウン、1000日から3桁、999、998ということで、あまりそれ以前のいろんなことを振り返らずに、もう大会に向けて、組織委員会もそうですし、周りの目も2020年に向けて、視点が統一したのかなという感じを受けております。

四つ目が、6ページ目が開閉会式でございます。こちらは先ほど会長の冒頭の挨拶にも

ございましたけれども、昨年1年をかけまして有識者の方々にお集まりいただきまして、法政大学の総長であるとか、お茶の水女子大学の総長であるとか、日本の英知と言われる方々にお集まりいただきまして、まずは基本コンセプトからつくったものでございます。

といいますのも、やはり開閉会式となりますと、すぐに総合監督は誰かとか、誰が演ずるかというところに注目が行きがちでございますけれども、やはり64年の大会、特に開会式・閉会式がいまだに語り継がれるように、恐らく何十年にわたって、あの開閉会式はどうだったのかと。また、大会そのものの歴史的、社会意義はどうだったのかといったところから、今後の数十年間、語り継がれるということが想定されることから、一気に演出に入るのではなくて、まずは大会の位置づけから、じっくりと1年かけて議論していただいたところでございます。

歴史的、社会的意義というところにございましては、東京大会が50年後、100年後に振り返った際に、心豊かな幸せな社会、持続可能な社会の実現に向けて、価値観が変わる契機となることが求められているとか、社会的意義といたしましては、世界平和を祈り貢献していくことで、アジアの発展と繁栄のために世界にポジティブなメッセージを発信していくといったところを御議論いただきました。

続きまして、7ページ、8ページ目が開閉会式の基本コンセプトでございます。キーワードを幾つか御紹介いたしますと、平和、共生、復興、未来、日本・東京、アスリート、参画、ワクワク感・ドキドキ感といったものでございます。これらを中心のコンセプトといたしまして、今後、基本プランをつくるというところに進んでまいります。

この開閉会式についての基本コンセプトの一つの目玉が第3章でございまして、4式典の位置づけでございます。ここにありますとおり、4式典を一連の4部作と捉え、起承転結となるようにメリハリを付けて構成するというところでございます。

過去大会の例を見ますと、まず、オリンピックの開閉会式の監督が発表され、その後、間をおいて、ぱらぱらと閉会式やパラリンピック開閉会式の監督が選任され、それぞれ独立に準備が進んでいくというところがございますけれども、やはり我々は、オリンピック・パラリンピック、さらに開閉会式、開会式・閉会式を一連のものと捉えまして、きちんとそれを通じて東京2020大会が何をメッセージで出すのかと。メッセージを出した上で、四つの式典をどう、それを役割分担していくかといったところを、まず検討をするべきじゃないかといったところが、この有識者懇談会の結論でございました。

それを踏まえまして、9ページ目でございますが、この年末でございます、12月20日で

ございますが、今ある基本コンセプトで4式典一体にということでございまして、これを単なる作文ではなく、中身のある形としても位置づけようということで、各式典の監督を選ぶ前に、この4式典一体となって何をメッセージとして出すのか、4式典全体のプラン・ストーリーをつくる体制を立ち上げるということといたしました。

その際、やはり開閉会式ということでございますので、映像とストーリーを統合できる映画制作に関わる人材、あるいは日本・東京の伝統を演出できる人材、あと、パラリンピックを表現できる人材、さらに内外の評判を得ることができました、リオ大会のハンドオーバーのチームの知見を活用すべきじゃないかという観点から、おめくりいただきまして11ページ目でございますけれども、ここにある8人の方々を選びまして、理事会で承認を受けまして、プランニングチームを結成させていただきました。

「君の名は」の川村元気さん。パラで活動されている栗栖さん。あとは、リオのハンドオーバーのチームだった佐々木さん、椎名さん、菅野さん、一つ飛んでMIKIKOさん。あとは、日本の伝統芸能ということで野村萬斎さん。あと「ALWAYS 三丁目の夕日」、1964年のころを題材にした映画、実写映画、あるいは「ドラえもん」のようなアニメ映画、幅広く撮られておられる山崎貴さん。この8人が現在、基本プランの構築に向けて議論を開始したところでございます。

12ページ目がIOC調整委員会の公式夕食会でございます。これも先ほど会長からありましたとおり、被災地の食材を活用して、IOCの方にもすごく印象的だったということをお願いいたしました。

下の米印にありますけれども、メディア委員会でも、出前メディア委員会のようなものができるんじゃないかといった御意見をいただきましたけれども、ぜひそれを今年度、このメディア委員会のワーキンググループで、それを被災地で開催できないかどうか、今、調整をしておりますので、お声かけの際は、ぜひ御参画いただければと思います。

おめくりいただきまして、平昌での広報活動でございますが、こちらは、それでは広報局長からお願いいたします。

○小林局長 13ページ目と14ページ目に平昌大会期間中の主な広報活動を入れております。

まず、平昌の現地でございますが、こちらはスキーの大会をする山の上の平昌と、あとは氷の、スケート等を行う江陵に、それぞれ大会の場所がございますけれども、リオのときは組織委員会と東京都と、あとJOCとで一つのJAPAN HOUSEをつくりまして、2020大会に向けて機運醸成を図りましたけれども、今回は平昌、山の上のほうはJOCが選手の会見や

ホスピタリティ提供を目的としてJAPAN HOUSEを別途設置しまして、東京都と組織委員会はこの江陵のほう、近くに韓国がつくる韓国ハウス、それからパートナー等が出店するいろいろな展示場がございますので、この地域にJAPAN HOUSEを設けまして、東京2020大会、それから開催都市東京の魅力を伝えて、2020年大会時の訪日促進につなげるようなハウスを設置いたします。

期間は、オリンピック期間、パラリンピック期間、おのおのそこに書いてあるとおりでございますが、オリンピックの開会式の前の2月8日にメディアの方々には内覧会をさせていただく予定にしております。

また、平昌の山の上のほうのメインプレスセンター内にも東京2020の広報オフィスを設けまして、こちらで韓国その他、メインプレスセンターに集まっている海外プレスに対して、東京2020大会のPRをしていこうと思います。

また同時に、平昌大会に参加している日本人のボランティアの声なども拾って、これを日本国内に伝えていくということも現地でいたそうと思っております。

また、14ページ目、国内のほうでございますが、2020大会におけるライブサイトの実施に向けて、運営実施方法などの課題への対応を検証することとともに、平昌大会での選手の活躍を間近に見ることによって、2020大会に向けた機運醸成を図ると。この双方を目的といたしまして、オリンピック期間中、パラリンピック期間中、こちらにございますように、東京都、宮城県、福島県、岩手県、熊本県等でライブサイトを、東京都とともに運営・実施してまいる予定でございます。

○中村CFO ありがとうございます。

続きまして、Road to Tokyo 2020という15ページ目の表ですけれども、ちょっとこれは細かいので、お手元にA3で別途お配りしております。これでもちょっと字が小さいのでございますけれども、幾ばくか見やすいと思いますので、こちらを御覧ください。

この表は昨年の理事会でも御説明したものでございますけれども、趣旨といたしましては、大会準備の全体像がわかりにくいと。一つ一つのテーマについてはいろんな場で御説明しますけれども、全体として、どういう段取りで進んでいるのかがはっきりしないじゃないかという声がございました。

また、いろんな、例えばチケットとかボランティアとか、時々、御質問を受けるわけですが、今、始まっていないということは、実は遅れているんじゃないかといった御質問も受けるわけでございますけれども、我々はIOC、IPCの定められたマスタースケジュ

ールのもとで作業をしているわけでございまして、そのもとでは、実はこれほど順調に進んでいる大会はなかなか珍しいという評価をいただいているということで、全体としては非常に進捗としては順調だということでございまして、そういったこともきちんと説明できるような資料をつくるべきじゃないかということで、つくったものでございます。

2020年までにどういった準備をこれから進めていくのか、一応、大きなところを一覧にしておりますので、ぜひ御覧いただければと思います。大会に向けた説明につきましても、こういった資料をもとに、これからもやっていきたいと思っております。

この中で、今日のテーマとも関連しますけれども、この1年間を俯瞰いたしますと、輸送や警備や飲食といった大会運営に向けた準備も着々と、この1年間で進めてまいりますけれども、もう一方で、国民、都民の方々に大きく関わるものとしたしまして、例えば、上から四つ目のボランティアが今年の夏から募集が開始されます。

また、下から五つぐらいは、先ほど申し上げましたマスコットについて2月に決めて、その後、名前であるとか、あるいは、立体の着ぐるみになるのはこの夏からでございます。

また、チケットの販売も一般販売は2019年の予定でございますけれども、この18年に大きなところは決まってまいりますし、また、一部関係者用のチケットも販売を開始するというので、こういったところが非常に国民、都民の関心を買うところではないかというふうに思っております。

大会の準備状況につきましては以上でございます。

それでは、引き続き資料の説明を続けさせていただきます。

資料2でございます。東京2020参画プログラムの現状についてでございます。

おめくりいただきまして、18ページ目でございますけれども、一昨年の10月にスタートいたしまして、1年と4カ月がたちましたけれども、今年に入りました1月10日の時点でございますが、1,000団体以上の届けがございまして、アクションも2万件を超えました。全ての都道府県から主体登録もございまして、アクションの参加人数全て足し上げますと、1,000万人ということでございます。2万件で1,000万人でございますので、一つ当たり500人、平均すると500人ということで、大きなものから小さなものまでございますけれども、非常にやはり、参画の輪が全国に広がっているのではないかということが言えると思っております。

19ページ目でございますけれども、主体登録でございます。内訳としては、自治体であるとか、スポンサーであるとか、大学などが多ございます。

また、教育プログラムということで、「よういドン！スクール」については4,589校、5,000校弱でございますが、実はこれ、マスコットの投票に参画いただいた学校につきましては、オリパラ教育実践校という位置づけで、また登録をしていただくということになっておりますので、これも1万を超える数に変わってくるということになります。

こうすることで、教育プログラムだけとか、マスコットだけということではなくて、いろんな組織委員会がやっているプログラムの相互の連携もあってまいりたいと思っております。

具体的な参画プログラムにつきまして、21ページからでございます。

一つは、今日、内閣官房の多田統括官にもおいでいただいておりますけれども、内閣官房が進められている「ホストタウン」、これは、ホストタウンについても、もう200以上の自治体が参加していただいておりますし、そのほか、バリアフリーとか、パラとか、いろんな切り口で進められておりますけれども、これと我々の組織委員会の参画プログラムがうまくタイアップいたしまして、ホストタウンでいろんなことをやるイベントを、我々の参画プログラムとして位置づけようということで、両者共同して進めているものでございます。これで東京以外の地方のホストタウンでも、参画プログラムの輪が広がることを期待しております。

その下が、このマスコットの小学生投票でございます。これも会長から最初にございましたけれども、過去大会でも、恐らく小学生でクラスごとに議論してもらって1票を投じてもらって、それで決めるというのは、なかなかないことで、オリンピック・パラリンピック史上もないということでございますし、小学生の立場をとってみても、全国の小学生が一つの物事を決めるというのは、多分、教育史上もないことではなかったかと思えます。

このメディア委員会におられる夏野委員にマスコット審査会のメンバーに御参画いただきまして、まさにこの小学生投票を知恵出しいただきまして、これが実現しているというところでございます。

23ページでございますけれども、1万3,228校が事前登録となっておりますけれども、直近、今日のお昼時点ですと1万3,900ということで、約1万4,000、67%ぐらいの学校が今、登録をしていただいているということでございます。

数だけではありませんで、先週、これは報道でもフォローしていただきましたけれども、フランスにあるパリの日本人学校でも投票をしていただきました。

また、東京にあるフランスのインターナショナルスクールでもフランス人の子どもた

ちに投票していただくといったように、いろんなですね、単に校数を競うだけでなく、東京にある海外の学校、あるいは、海外にいる日本人の小学生にやっていただくとか、あるいは、単に人気投票だけではなくて、そのオリパラ競技と結びつけるというような形で進めているところでございます。

このマスコット投票の一つのポイントは、単なる参画だけではなくて、大会で活躍するマスコットを小学生が決めていただくと。大会に直接参画するという実感を小学生に持ってもらえるというところが一つ大きいかなと思っております、同じ趣旨のものとして、24ページのメダルプロジェクトがでございます。

こちらもし繰り返しになりますが、何度かこの委員会でも御説明させていただきましたけれども、皆様がお持ちの携帯電話であるとか、パソコンであるとか、そういったものを抛出していただいて、単に環境に優しいということではなくて、アスリートの胸に光るメダルをそれで作ろうということで、これも参画したという実感が持てる一つの取組ではないかと思っております。

現状ですが、24ページにありますとおり、携帯電話のほうは178万台ということで、お陰様で想定を上回っている状況で集まっております。

他方で、小型家電のほうは、ちょっとこれから、もう少し頑張る必要があるのかなと思っております。といいますのも、携帯電話では、金は十分な含量がありますけれども、銀はどうしても小型家電、特にPC、コンピューターからとらなくてはいけませんで、今のところ銀が少し想定よりも低い状況ですので、今後はパソコンなどの回収強化に取り組んでまいりたいというふうに考えております。

25、26はこのメダルプロジェクトの御説明でございますので、割愛をさせていただきます。

27ページ以降は、そのほか、参画プログラムの具体的な例でございます。タイトルのみの御紹介とさせていただきますが、1000 Days to Go!の一環として、11月26日に文化オリンピックナイトを東京駅前の行幸通りで行いました。

また、地方でございますけれども、福島市とスイス大使館がコラボレーションいたしまして、これ先ほど申し上げたホストタウン交流事業の一環でございますけれども、「アルプスの少女ハイジとスイス展」ということをさせていただきました。

29ページでございます。こちらホストタウンでございますけれども、町田市で南アフリカ共和国を招きまして、これは南アフリカの国技でもあるラグビーについて体験とか

紹介をさせていただいたということで、2020大会だけでなく、ラグビーのワールドカップに向けた機運醸成にもつながる取組でございました。

また、東京都の青梅市でございますけれども、レガシーについて、いろいろみんなでディスカッションするようなワークショップも開かせていただいております。

また、復興の関係ですが、31ページ、32ページでございますけれども、1000km縦断リレー2017ということで、昨年夏の期間、これは毎年開かれているものでございますけれども、参画プログラムとしての位置づけも兼ね備えてやっていただいております。

また、「ふくしまアイデアコンテスト」ということで、どうやったら2020大会が盛り上がるかどうかというところで、福島にいる学生、高校生、大学生からもいろんなアイデアをもらいました。その幾つか、ぜひ実現できるようにしたいというふうに思っております。

説明が長くなって恐縮でございますけれども、続きまして、Nipponフェスティバルについても簡単に御説明したいと思います。

こちらは34ページでございますけれども、開閉会式が7月、オリンピックの開会式は7月24日でございますけれども、その直前、ちょうどその聖火リレーが全国を回る、スタートと同時、2020年の春ごろから、日本の文化プログラムの集大成といたしまして、東京2020Nipponフェスティバルというものを展開したいというふうに考えております。

具体的な内容につきましては、35、36はちょっと割愛いたしまして、38ページ目から御覧いただけますでしょうか。

幾つかのプログラムを、これは例示でございますけれども考えておりまして、一つは、「4つの物語」というふうにさせていただいておりますが、38ページはその題紙でございます。聖火リレーとともに始まる祝祭感ということで、全国で聖火リレーが回るのと同じように、その土地土地の伝統文化を中心としたフェスティバルを開いていただきまして、聖火とともにその思いをつないでいただいて、7月24日の開会式につなげるようなプログラムを、地方と一緒に展開できないかというふうに考えております。

39ページが二つ目でございます。大会を象徴するプログラム、これは幾つもやるのはなかなか難しゅうございますけれども、組織委員会でも一つか二つぐらいは音頭をとりまして、伝統芸能とテクノロジーをうまくコラボレートしたような何かイベントができないかというふうに思っております。

三つ目がパラリンピックに向けた機運醸成でございます。オリンピックとパラリン

ピックの間の2週間、それだけではございませんけれども、オリンピックがパラリンピックにうまくバトンタッチができるように、その間の期間、イベントができないかというふうに考えております。

四つ目が41ページでございますが、これはちょっとまた毛色が違っておりまして、そういう今までの①～③のような大きなイベントとは別に、小さなムーブメント、何か一人一人が小さなアクションでも参画できるような、そういった取組ができないかと今、考えております。

これらにつきまして、今いろいろ文化・教育委員会などを中心に、今はアイデアを整理しているところでございますが、今年の7月ぐらいには一つのモデルタイプが発表できないかというふうに思っております。

また、このフェスティバルのロゴにつきましては、この野老さんに今、制作をお願いしているということでございます。

続きまして、資料が続いて恐縮ですが、資料3、ポスター企画でございます。こちらは、このメディア委員会で御参画いただきまして、誠にありがとうございました。改めまして、全体像を御説明したいと思います。

45ページにありますけれども、今年のテーマは、「～知ろう！観よう！応援しよう！～東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に抱く私の夢」ということでございまして、オリンピックとパラリンピックの2部門を設けております。

全国の小・中学生に加えまして、特別支援の小学部、中学部及び海外の日本人学校を対象としております。

応募総数は、1万4,396点でございました。実は、去年はリオ大会がございまして、リオに合わせてできましたのと、あとは、応募期間が大体倍ぐらい、期間が夏から秋にかけて、長さが2倍ぐらいあったこともございまして、去年は2万6,000でございました。ちょっと減ったのは残念でございますけれども、御覧いただいたように非常に力作ぞろいでございます。

冒頭にごございましたように、来年はマスコット、今年の夏に決まるマスコットをテーマに書いていただこうと思っておりますが、このマスコットの投票参画とともに、ポスターにもつなげていきたいというふうに考えております。

選考の流れでございますが、本日の投票によりまして、以下にあります18作品を決定したいというふうに思っております。表彰式は3月でございます。

47ページにありますとおり、去年はこの虎ノ門ヒルズのところで行いましたけれども、今年パナソニック様の協力を得ることができまして、有明にあるパナソニックセンターで行おうと思っております。子どもたちも喜んでいただけるのではないかと考えております。御案内を皆様にも差し上げますので、ぜひ御参画いただければと思います。

また、組織委員会だけではなくて、パートナー企業であるとか、自治体で展示をしようというふうに考えております。

ポスターの関係は以上でございます。

○日枝委員長 ずっと長く、いろいろ御説明いただきました。とりあえず、ここで議事を進行させていただきたいと思っております。御説明ありがとうございました。

それでは、1000 Days to Go! の取組について、事務局から御説明をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

○小林局長

少し前のことになりますけれども、今年も夏になりますと、2年前ということ意識したイベントを組む関係で、改めて全体について御報告を申し上げたいと思っております。

ここにいらっしゃいますメディアの皆様には、さまざまな企画、報道を通じまして、いろいろな取組をして御協力をいただきましたので、改めてお礼を申し上げたいと思っております。

資料の1ページ目、50ページを御覧ください。この1000日前では大きく三つの取組をいたしました。

一つ目は、カウントダウンイベント、オリンピック・パラリンピックそれぞれの開会式の1000日前に、10月28日には日本橋の中央通りで、それから、11月29日には東京スカイツリータウンで、それぞれ実施をいたしました。

また、二つ目は、この10月28日～11月29日の期間、開会2年前という日のみですと、なかなか様々な活動を合わせられませんので、この期間を1000日前キャンペーン期間と位置づけまして、都内区市町村、全国自治体、パートナー、メディア各社の方々と連携をしまして、関連プログラムとして全国でさまざまなイベントを展開いたしました。

三つ目は、「わたしの参加宣言キャンペーン」でございます。これはSNSで、1000日後の自分がどのような形で大会に関係するかを宣言してもらおうと、特別なプレゼントがあたるというものです。広く一般から参加宣言を募ったものですが、アスリートや著名人の方にも多くの参加宣言をいただきました。一部はこの会議室の外側の壁に展示しております

ので、お時間が許せば、お帰りの前にぜひ御覧いただければと思っています。

51ページ、御覧いただけますでしょうか。これがオリンピックのカウントダウンイベント、それから、52ページ、パラリンピックのカウントダウンイベントの様子をまとめたものでございます。それぞれ1万5,000人、3万人の来場を得て、メディアにも多数取り上げていただきました。

続きまして、53ページ、54ページを御覧ください。こちらが二つ目の取り組みである100日前関連プログラムの事例です。紙面の都合上、非常に絞って書かせていただいておりますが、全国で308件、東京都以外でも130件がさまざまな関連プログラムを実施いたしました。

大会パートナーが実施したさまざまなプログラムもございまして、全国の各自治体が行ったプログラムの一例が挙げられております。

資料55ページを御覧ください。こちら三つ目の取組であります、参加宣言キャンペーンの実績でございます。左の絵に、少しいメージを書かせていただいておりますが、こうした特設サイトの中で、参加宣言をアップしてもらいまして、開催情報を集約するとともに、一般の方々の参加意識の醸成・共有を目指したものです。

右側の棒グラフは、アクセスの推移でございますけれども、10月28日、29日のイベントが行われたときなどに非常に多くのサイトアクセスがございましたが、ずっと、そのパラリンピックの開会式に向かってもそうですけれども、パラアスリートの投稿が増えるなど、一貫してアクセスが多い状況でございまして、合計で2万件に迫るキャンペーンの応募をいただくことができました。

最後の56ページでございますけれども、今回、広く一般の方々から大会ステークホルダーまで、さまざまな形で参画いただける複合的なキャンペーンが行えたということもございまして、メディアにも多数取り上げていただきましたおかげで、大きな成果を得られたと思っております。

大会機運を全国的に波及させる広報活動は、今後、強化してまいります予定でございますが、冒頭、会長からもお話がございましたし、先ほど中村のほうからも御報告を申し上げましたけれども、この夏に向けて、またさまざまなことが始まってまいりますので、ぜひ、委員の皆様方の御助言をいただきたいと思っております。

具体的には、マスコットにつきましても先ほど報告がありましたように、名前とともに、ぬいぐるみや着ぐるみが夏には登場することになっております。大会盛り上げのため

にさまざまな活用を考えてまいりますけれども、ぜひ委員の皆様方からもアイデアを賜ればと思っております。

また、ボランティア募集に関しましては、夏に詳細な要綱が発表となりまして、秋から募集開始を具体的に実施するという予定になっております。既に多くの照会が来ておりまして、関心は高いと思っておりますが、熱意のある多くの方々に応募していただきたいと思っております。委員の皆様方が、自社の事業でボランティアを動員されたこともおありと思いますが、広報の観点等におきまして、さまざまな御知見をいただければと思っております。

また、チケットにつきましても、夏ごろを目処にチケットの購入や情報入手のために必要な登録、サインアップキャンペーンを行ってまいります予定でございます。一般販売自体は来年以降ということになりますが、まずは、多くの登録者を確保していくための広報が不可欠となっております。こうした点につきましても、ぜひ御助言をいただければと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

私からは以上でございます。

○日枝委員長 御報告ありがとうございました。

事務局から東京2020大会の準備状況、あるいは企画参画プログラムの現状、小・中学生からのポスター企画、今の1000 Days to Go!への取組など、盛りだくさんの御報告がございましたが、ここで皆様からいろいろ御意見、御質問等をお受けしながら、次に進めたいと思っております。

皆さんが御発言しやすいように区切って言いますと、ボランティア活動は皆さん、いろんなことが御意見あると思っております。それから、チケットの販売もあろうかと思っております。それから、マスコットの問題などなど、どういう角度からでも結構でございますので、御発言あるいは御質問をお願いしたいと思っております。どうぞ、挙手をお願いしたいと思っております。

○池田委員 東京写真記者協会の池田と申します。

今、中村さんや小林さんから報告の中で、ちょっと3点だけお聞きしたいことがあります。

まず、マスコットなんですけれども、今日の午前中にリリースされた資料の中で、全国2万1,000校のうち、およそ1万4,000校しか登録がないというのは、3校のうち1校は登録していないということになってですね、1カ月しかないのに間に合うのかなという感じが実

はしております。

今までの大会ではやったことのない取組で、非常にいいアイデアだと思っておりましてけれど、学校の責任者が悪いのか、子どもたちがあまりにもキャラクターが氾濫していて、見ていて何も驚かないのかわかりませんが、組織委員会のこれからの取組をどうされるかということが一つ。

もう一つ、広報局長の小林さんから、日本人ボランティア、平昌でのお話がありました。私も、リオに入ってボランティアに相当助けられた記憶が鮮烈に残っておりますけれど、現地にいる、平昌にいる日本人のボランティアの人たちとは、もうコンタクトをとっているのかどうか。

もう一つ、また、メダルプロジェクトとあって、携帯電話や家電からの金属を回収すると、これもまたすばらしいアイデアだと思いますけれど、金メダルについては、もう必要量が集まったということで、中村さん、よろしいのでしょうか。その3点をお願いいたします。

○中村CF0 ありがとうございます。第1点と第3点について、まずお答えをいたします。

第1点は、非常に厳しい御意見を頂戴いたしました。もう本音のところを申し上げますと、これはアイデアとしては非常に、いろんな意味で我々の思いと、子どもたちに参画してもらおうというのと、東京だけじゃなくて全国に参加してもらおうということは非常にいい切り口だと、夏野さんからアイデアをいただいたときも、ぜひやろうと思いましたが、これも、これ、強制はできないんですね。

したがって、一つ一つの学校にお願いをしなきゃいけない。学校の先生も、皆様よく御案内のとおり、物すごく忙しくて、いろんなことをやれやれと言われていて、もうこれ以上、仕事、勘弁してくれという中を、1年かけて、教育委員会の集まりに行つては、来年、この秋からやりますよと説明をしたり、全ての学校にはがきで登録をお願いいたしますとあって、このはがき、なくさないでねとお願いをしたり、そういった成果がありまして。本当にいろいろ中で話しているときは、それだけしても、なお、どこまで参画しているか、自信が持てなかったところあります。本当に最初のころは、目標どのぐらいですかと聞かれても、あまり答えないようにしようとかですね。

でも、本当にほっとしたのは、半数を超えたところで、年末ちょっと前ですけども、ほっと胸をなでおろしたというのが、すみません、ちょっと目線が低いのかもかもしれませんが、担当者としては。その2万1,000校に全てお願いすると、言うは易し、非常に行うは難

しで、お願いをするだけでも大変ですし、全部返事をいただくというのはなかなか難しいところがありまして。ただ一方で、まだまだ頑張れるんじゃないかというところは、全くおっしゃるとおりだと思っています。

さらに掘り起こしをするために、またちょっと今は検討中ですが、新聞広告のようなものも、皆さん投票してくださいと、子どもに訴えかけるような何か工夫ができないかということもやっておりますので、自己満足にならずに、さらに、2月22日に向けて頑張っていきたいというふうに思っております。

あとは、繰り返しになりますが、数も大事ですが、そこでどんな議論が行われるかとか、東京だけじゃなくて、地方であるとか、海外とかでも、どんな議論が行われたとか、そういったものもエピソードとして集めて、皆様に御紹介できればいいのかなというふうにも思っております。

三つ目のメダルプロジェクトですが、これはちょっと私の発言が不十分で申し訳ございませんでした。金メダルも実は、御存知の方もいらっしゃるのかもしれませんが、中は全部純銀で、コーティングのところだけ金なんです。したがって、金メダルといっても銀が非常にいっぱいいるということがございますので、まず、その金メダル分が集まったということではございません。

じゃあ、金が必要量集まったかということがございますが、これも、大体2年半ぐらいのプロジェクトを考えていますので、想定よりは今は一応、順調に集まっているということがございます、必要量が集まったというところでは、まだございません。正確に言うところでは、必要量が集まったというところでは、まだございません。正確に言うところでは、必要量が集まったというところでは、まだございません。

○坂上副総長 二つ目の平昌大会の学生のボランティアの方と連絡をとっているかどうかということですが、これは外大の学生さんを中心に平昌大会のボランティアに行かれるということで、ここについては大学連携を行っておりますので、そこを通じて既にコンタクトをしているところでございます。

この後、実際に大会が終わった後は、参加された学生のボランティアの方の体験談とか、そういうことも伺った上で、広報をしていきたいというふうに考えております。

ありがとうございます。

○小林局長 1点、マスコットの関係で補足をさせていただきたいと思うのですが、私も、ある程度、長い期間の投票期間を設けて、最初はどのぐらいの登録数が出るかというのが、まず1番目の勝負だと思っていたのですが、やはり年明けになりますと、どうして

も失速しますので、何とかもう一回、一押しをしなくてはいけないなと思っておりました。

今日はちょうど1カ月前でございましたけれども、先ほども中村のほうから報告いたしましたように、フレンチスクールでやってみたり、アメリカンスクールでやってみたりというの、何とか新聞などメディアでも取り上げていただいて、あ、うちの学校していなかったというふうに思い起こしてもらうために工夫をしていく必要があると思っていました。

今朝方のリリースを見ていただいたということで、大変うれしく思っておりますが、その中でも、新たにこんな特典、プレゼントがあるんだよということを出しましたのも、これをもとに何とか目を引く、もう一押し、二押しをしていけないかということでございます。

ということですので、ぜひその辺りも、もし、もっとこんなことをしたらよいということも含めまして、いろいろ御示唆をいただければと思っております。

よろしく願いいたします。

○日枝委員長 今、小林さんから、皆様のアイデアが欲しいということでございますので、ぜひございましたら、御発言いただければと思います。

どうぞ。

○池田委員 今、小林さんのお話の中で、デジタルによる表彰みたいなのも例示する中にあったと思いますし、シールというんですかね、100校で500枚というのは、あまりにも少なくありませんか。

予算が必要なことは十分知ってはいるんですけど、もう少し何とかならないのかなという、あの数字を見てですね。応募の少なさと、それに対する、応募してくれた小学生に対する、何か記念に残るようなものを考えてもらったほうが、自分たちが選んだマスコットが2020年大会のマスコットなんだよ、というのが強く印象に残ると思うんですけど。ぜひ、お金のかからない方法を探していただいて、やっていただければと思います。

○日枝委員長 まとめて御回答いただければと思います。

結城さん、どうぞ。

○結城委員 ありがとうございます。まさに森会長おっしゃったように、これから人々のところに届く、いろんな企画、イベント、そして事柄、始まっていく、その今、多分、起点に我々は立っていて、どのようにということなのだとして了解をしています。

そこで、釈迦に説法だと思えますけれども、一番心がけていただければと念願をいたし

ますのが、このマスコットの小学校の投票というのはなぜ関心を、集めたのか、私は集めたと思っています。そして、その評価を得ているのかというのは、やっぱり、投票をするということで、何を伝えたいのかが恐らく、意図が見えるからだと思います。

例えば、スポーツとかオリンピックというものは何、そして、その力って何、そのすばらしさって何という部分を、どう組織委員会として乗せて、人々にいろんなイベントごとに巻き込むキューを出すか。そこをぜひお考えいただければと感じています。

例えばで、本当にもう恐縮で、耳汚しでございますけれども、例えば、じゃあマスコットというのは、みんな、全国の学校でいろいろ投票をして決める。ところが、その決める段階でも、自分はこう思っていないという、その方向性が決まった子だっているでしょうし、最終的に自分たちのクラスが選んだ投票結果が活かされない子たちもいますよね。そうすると、じゃあ、競争って何、オリンピック、スポーツと同じなんです。競争って何、フェアな競争って何、終わった後たたえ合える競争って何。そのスポーツ精神みたいなもの、それを乗っけさせてしまう。

例えばですけれども、お金がかかりますが、着ぐるみの、それぞれのマスコットに、ボールでカゴを持たせて、どこかの紅白みたいに玉入れをして、もしくはデジタル投票をして、その全国の子どもたちの意思が、その場で結果が判明するような何かをおやりになって、それを子どもたちの学校にネットで、YouTubeなどで配信をし、と同時にそのマスコット、負けたほうのマスコットが勝ったペアをたたえる、その何かシンボリックなものをそこに持ってきてしまう。よかったねという、いいねと言ってあげるという、その部分で何かを伝えるとか、何かいろいろ工夫ができ得るのではないかと。出口調査も私、やりたいですけれども。そういった何かを、メッセージ性を持たせるということ、ぜひお考えいただければ。

ボランティアにしても、やっぱり、やる方たち、私も過去いろいろな方のお話を聞いていると、やった自分が誰かを助けてあげるためにやったと思っていたら、一番教えられた、一番経験を与えられた、一番目を開かされた、いや、すばらしかった。その部分の心の部分というのに、ぜひ食い込んだ、募集、発信をして工夫していただければ。

私が、卑近な例で恐縮ですが、一番自分として心に残っている二つの言葉があつて。一つは、被災地の皆様が、自分たちはいろいろ助けていただいたけれども、自分が一番心の意味で復興したと感じられるのは、自分が今度はどなたかを、世界を助けてあげられる立場になったときだと。人に何かをやってあげられる、そして感謝される、役に立つ。その

実感というのを物すごく、自分自身の享受になる。そういった部分の、例えば、被災地のほうからボランティア、特別な意味でのボランティアを何か募集をする、プロジェクトを募集をするとか。

あとは、イギリス、ロンドンの例でございますけれども、もう引退なされた、イギリスではうんと高名な、お年を召した馬術の選手の方が、馬術の会場で一介のボランティアとして、自分の身はそこは明かさずにやっていて、それを周りのボランティアが発見して、その後、その人は亡くなっちゃいましたけれども、何年か、もう毎年のようにボランティア同士で集まって何か活動をしたり、その人を囲んでネットワークをつくったりしていたと聞いています。

例えば、選手という軸もあり得るかと思います。自分たちが昔やった競技、それに対して自分が恩返しをする。その流の中で、もうお年を召した、でも知られている、東京64年の方でもいいんです。選手の皆様を中核に持ってきて、ボランティア活動というものを。別に、特にその方があれだったらPRしなくてもいいと思うんです。実はそういう方もいるんですよというイメージ、メッセージが出せれば、心をどう乗せるかという部分が見えるんじゃないかと思います。

開閉会式に関しても、総合プランニングチーム、素晴らしいと思います。ここがどのような、その詳細は出せない、もちろん思いますけれども、議論をする、日本をどのように世界に出すの、日本とは何で、世界の中で私たちは何を発するのか。その部分というのをちょっと投げかける、世間に投げかけるだけで、いわゆるアイデンティティとか、日本のこれからとか、みんなが考えるきっかけになり得ると思うんです。双方向だったら、もっと素晴らしいです。

チケットにしても、その参画、最後に参画といったものを過去にもやっていらっしゃいますけれども、一校一国とか、いろんな教育の流れとか、それから人々の参画、これだけ数があるんでしたら、その中で、ある意味でアワードみたいなもの、奨励賞でもアワードでも何かをつくって、で、そこに優先して、廉価でチケットをお出しするとか。チケットの一部分だけそのような形で、何かメッセージ性を乗けて、みんなにやってもらうためのチケットという形の取り組み方をなさってもと思います。

すみません、長くなりました。

○日枝委員長 ありがとうございます。

それらについては、後ほどまた御回答をいただくことにします。

ほかにどうぞ、御意見。

○齋藤委員 フジテレビの齋藤と申します。

多少のスポーツイベントの経験がございますので、そこからの知見という話が、小林さんからありましたので、多少、御披露させていただきたいと思っておりますけれども。

日本テレビさんと一緒にやっております東京マラソン、この2月にもございます。こちらは毎年、1万人以上のボランティアの方を動員してイベントが行われておるんですけれども、こちらは、やはりもう10年の歴史がございますので、結構リピーターの方も多数いらっしゃいますし。そういう意味では、この東京マラソンの1万人の方というのは、今年から登録制になるとも聞いておりますので。この方々をまずベースに、東京オリンピックもやってくれませんかという話の前提で、やってはどうかということでございます。

特に、この東京マラソンがすばらしいなと思っておりますのは、東京マラソンは日本人だけではなく、海外の方も多数参加されておりますので、いわゆる多言語対応のメンバーの皆さんの登録も結構しているということで、恐らく東京オリンピック・パラリンピックにとって、日本という国が一番苦手なのは、その多言語のところでございますので、こういう方をあらかじめ、きちんとキープしておくといえますか、お願いをしておくというのも一つの大きな対策になるのではないかなと。

実際には8万人ということでございますので、東京マラソンの1万人、しかもたった1日でございますので、8万人を何十日かというのは、なかなか大変なことではなからうかなというふうに思っておりますが、そういうことが行われております。今度、2月24日もございますので、そちらで何らかのそういうアンケートを実施してもいいのかなというふうにも思っております。

一方で、私どもでやっておるイベントでございますけれども、春の高校バレーというイベントがございまして、こちらは1日当たり400人ぐらいの高校生のバレーボール部員の皆さんをお願いして、お手伝いいただいているんですけれども。これは高体連のほうのバレーボール専門部会のほうから先生を通じて、体育の授業の一環として来てもらうということで、希望者のみという形ではございますが、募集をしているということでございますので。

やはり、オリンピックは教育の一環という話もございましたので、これ夏休みでもございますので、夏休みの登校日ではないんですけれども、学校教育、特に体育というものを

通じて、いろいろ高校生とか、まあ中学生は難しいかもしれませんが、募集をするというのも一つの考え方かなというふうに思っております。

それから、チケットに関しましては、まあ、いい方法なのかどうか、ちょっとわからないんですけど、たまたま私が普段行っている床屋さんのお兄さんが、オリンピック近づいてきましたねと。でも、自分は東京都に住んでいるんですけども、チケット絶対、当たらないよねって話しかけられまして、私が多少関係しているということを知らないんですけども、そういう話もありましたので。

これはサッカーのワールドカップなんかですと、会場のある自治体に優先的にまずチケットが販売されて、残ったものが一般に回ってくるみたいなこともございますので。これは先ほどの参加感という意味では、僕は最大の参加感というのはチケットが買えるということだと思うので、何らかのそういう優先期間みたいなものを、住民票に基づいてやるのかどうかちょっとあれですけども、少なくとも会場とか、交通規制のかかるエリア。特にゴルフが行われるエリアは道路も2車線ですので、住んでいる人は、恐らくゴルフの間中は全く移動できないというようなこともあるかもしれませんので、そういう不満を抑える意味でも、そういう販売の仕方というのも一つ、お考えになったほうがよろしいのではないかなというふうに、チケットに関しては思います。

ただ、フランスのワールドカップで、有名な話ですけども、地元の人にチケットがほぼ売れてしまったために、当日、空席ばかりだったということだったり、日本人の観光客が地元の人からチケットを高値で買ったりとか、そういう、もしかするとデメリットもあるかもしれませんので、その辺はイギリスのような公式なチケットを買ってくれる、まあ日本風に言うと、ダフ屋みたいなものを公式化して、チケットをしっかりと必要な人に渡るようにするというようなことも、もしかしたら必要なのかなと思ったりいたします。

私は以上です。

○日枝委員長 ありがとうございます。

ほかにございますか。

○安藤委員 マスコットの件ですけども、2月の終わりに1回と、それから正式には7月でしたっけ、発表があるということでしたけれども、一体どっちが正式なのかとか、つまり、どういう盛り上がりを考えて発表しようとしているのか。2回の山というのは、それなりに山をつくりたいからなのかもしれませんけれども。

申し上げたいのは、できるだけ事前に情報を我々メディアにくださいと。つまり、いついつ、こういう形で発表しますよ、というだけでは、当日、取材に行って、その日のニュースをちょっと出すだけの盛り上げしか関わりようがないというのが正直なところなんです。

ですからもっと、秘密なところもあるんですが、事前に、こんな形で考えているんだけど、どうだろうか。どうだろうかと言うと大げさかもしれませんが。そんなことを一緒に盛り上げていけるようなことをしてもらえたらありがたいなと思いますし、それはマスコットだけではなくて、今後、先ほどのボランティア、あるいは、もっと言えば聖火リレーなんかは一番、我々は関心が、国民の皆さんが関心があるところですから、そういうものについてはできるだけ早く情報をいただいて、どう盛り上げられるかというのを考えていただきたいという点で、とりあえず、マスコットはどんな発表の仕方を考えていらっしゃるのか、その辺を後ほどお聞かせいただければと思います。

○日枝委員長 佐野さん、どうぞ。

○佐野委員 産経の佐野です。

先ほどちょっと結城さん触れられましたけれども、こういった、例えば、何か発表ごとをやったりするということに、お金がかかるということ。これはやっぱり大きなネックだろうと思うんですね。イベントをやれば、そこにお金が動かざるを得ないという問題があります。

例えばマスコットとか、あるいはこの木材リレーであるとか、ここに坂牧さんいらっしゃるからあれなんですけれども、ある種のアンブッシュに近いスポンサーをとらないと、なかなかこういったものはできづらいんじゃないかなという気がするんですね、予算的には。組織委員会自体にそれほどお金があるかどうかは知りませんが。

いわゆる、こうしたものに対する若干の緩める措置ができないものだろうか。つまり、地方の自治体、あるいはJCを参画させて、地方から盛り上げていくというためには、どこか、まあ逃げ道といたら非常に失礼な言い方なんですけど、正直申し上げて、この18ページの日本地図を見ていますと、やっぱり、もう東京と大都市圏というところに集中しているわけで、オールジャパンになりづらいという思いが非常にするんですね。

そこにちょっとした、まあ工夫というか、をすることによって地方イベント、あるいは、その地方で、まあ小学校のそういった、例えば結城さんがおっしゃったようなマスコットを上手に使って何か盛り上げるようなやり方とかというのは、そのちょっとしたところの

緩めることで、できるじゃないかなという気もします。

それから、ボランティアなんですけれども、ボランティア自体は18歳以上なので、これはもうはっきり言って、ここに新たなものを一つつくる必要があるんじゃないかなと思います。それはやはり、ユースボランティア的なもの、高校生を主体にしたユースボランティア。あるいは70歳以上の、70歳よりもうちょっとかな、シニアボランティアという制度を設けてもいいんじゃないかなと。

つまり、中心になる世代のボランティアと少し違った角度から、違う形で参画していけるようなボランティア。年齢層を広げることによって、例えば1964年東京オリンピックのときには、小学校はごみ拾いをやりました。これでいいんです、小学校は。だから、近所のごみ拾いだけでもやりましょうよ。マラソンが通るコースのごみ拾いやりましょうよ。そういったことでもいい、これでもボランティアです。世界リレーのコースを、まあ沿道に出て、ちょっときれいにしてあげようよ、でもいいんじゃないかなと思うんですね。そういった形の参画の仕方というのは、十分あろうかなという気がします。

やっぱり、それをやった人たちに、これもお金がかかる話かもしれませんが、若干のシールとか、そういったものを差し上げるとか。本当はピンバッジをあげればいいんだろうけれども、これもお金が大変かかります。そういったことも含めた、何か措置できないだろうか、というのは常々思っております。

いろんなことで、やっぱり、制約の中で成り立つ社会ではあるんですけれども、少し角度を変えてあげるということが必要かなという気がしています。

○日枝委員長 ありがとうございます。

ほかにございますか。

どうぞ。

○藤丸委員 TBSの藤丸と申します。

私が一つ気になったというか、考えたのは、この一番初めにいただいた、3ページのONE TEAM PROJECTの動画についてなんですけれども。私は全部、拝見させていただいたんですが、とても、すごく興味深く、すごくおもしろかったのと、あとは、本当にテレビ番組にしたいぐらい、とてもいいなと思ったものなんですけれども、なかなか、やっぱり周りの人たちが知っている人がとても少なく、もう少したくさんの人に見ていただけるようにしていけばいいんじゃないかと思ひまいて。

インスタグラムなんかをのぞいたんですけれども、インスタは動画じゃなくて静止画で

載っていたりするものだったので、ちょっと短目に動画を載せるとか、あとは、もうちょっと年齢層を下げてみるとかすると、もうちょっと若者に広く伝えられるのではないかなと思いで。とてもすばらしかったので、ぜひ、やっていただきたいなと思い、発言させていただきました。

○日枝委員長 ほかにございませんか。

だんだん時間も迫ってまいりまして、事務局の答える時間もございますが、どうぞ。大変、今まですばらしい案も出てまいっておりますが、そのほかに、ぜひ、あったら御発言をいただきたいと思います。

どうぞ。

○檜原委員 ニッポン放送の檜原でございます。

1000日を切ったというところで、今まで語られてきた一つ一つの事象が、やっと芽になって見えてきたかなという感じがあるんですけれども、今、藤丸さんがおっしゃったように、ONE TEAM PROJECTなんかは、いきなり何か知るといようなこともありまして、やはり、ああいうものはデジタル上の拡散がもっと必要なもので、それに合った人たちにもっともっと知らせるべきではないかなというふうに思います。

そんな中で開会式・閉会式に関して、こういうプランニングチームが設立されたということはよく理解しますし、たまたまあの報道が出た当日に山崎監督にお会いすることがあって、非常に御本人も前向きに考えていらっしゃったんですけれども。

この四つの式典が一つのストーリーになっていくというコンセプトはすばらしいんですけれども、実際に質問としては、それぞれの総監督というのはどういう視点をもとに決められていくのかが、非常に我々の注目の的なんです。ここにいる8人の中から、実際にそれぞれの式典に担当が決まるのでしょうか、それともそれ以外というのもあり得るのかを教えてくださいなというふうに思います。

○日枝委員長 じゃあ、今のは質問なので、中村さんからか、答えを。

○中村CF0 ありがとうございます。非常に多くの質問をいただきました。

それぞれマイクを回しますので、お答えさせていただきたいと思います。

まずは、開閉会式につきましてですけれども、結城委員から、もうちょっといろんな、アイデアベースから参画、いろいろな人のアイデアを、意義とかをですね、いただいたらどうかという話と、檜原委員から、今後の監督ですね、どういうふうを選ぶのかといただきました。

参画というのは、我々も非常に大きなコンセプトだと思っています。この大会、2020組織委員会自体、非常にそこが、2020年大会の一つの大きな特色が、いろんな人に参画してもらおうというところですので、開閉会式も例外ではないと思っています。

具体的には、やはり当日ですね、例えば開会式の7月24日にスタジアムで見る人だけでなく、スタジアムの外にいる人も巻き込んで、何かできないかといったところが一つの大きな切り口だと思っています。

それよりもっと先、コンセプトに至るまでというところは、ちょっとこれから、問題意識をいただいたので検討させていただきたいと思っています。

あと、総監督ですけれども、これは正式には、恐らく今年の夏ぐらいに最終的には理事会で決定することになっております。まずは、御手洗座長がいる有識者懇談会で選んだ上で理事会で決定するということでもありますので、今はまだ白紙でありますけれども、8人の方に基本コンセプト、共通プランを選んで、これからつくっていただくので、何らかの形でこの8人の方が実際の式典に関与はすると思いますが、それが監督という立場なのか、それぞれ専門のところ、横串で見ていただくのかはまだ決まっていません。ですし、それ自体、非常に注目度を浴びる案件ですので、今日のところはその程度で御容赦いただきたいと思います。

○坂上副総長 坂上です。ボランティアについて、4点ほどお話をいただいておりますので、御説明をしたいと思います。

まず最初に、結城委員からのお話ですが、私どももアドバイザーリーボードという会議を設けていまして、そこでいろいろと有識者の方々から御意見を伺っている中で、ボランティアの活動というのは、例えば、その日の終わった後にボランティアの人たちと一緒に、ごとに話をする機会とか、それから終わった後に同総会のようなものを持って、そこでボランティアの方々のコミュニケーションの場をつくって行って、レガシーに残していくということは非常に重要だという御指摘を受けておりますので、私どもとしても、実際に今後の進め方としては、そういうものを非常に重要視しながらやっていきたいなというふうに思っております。ありがとうございます。

それから、齋藤委員からの東京マラソンとの連携の問題ですが、これは当然、東京マラソンの経験の方が、我々のボランティアについてもベースになる方になると思っていますので。次の2月の東京マラソンにおきましても、事前の研修会があるということで、ここでは我々のPRの動画も写させていただいて、ぜひ勧誘活動をしたいなと思っていますし。

そもそも東京マラソン財団とはボランティアの連携協定を結んでおります。

それからもう一つは、ボランティアにはリーダーの方が必要でして、このリーダーの方の有力な候補が、東京マラソンでこれまでやってこられた方かなというふうに思っていますので、応募の段階でそういうことも書いていただいた上で、リーダーの方になっていただきたいなというふうに思っております。

それから、春高バレーであるとか、それから佐野さんからの御指摘で、幅広い、特にお子さんですね、小学生、中学生、高校生、こういう方のボランティア活動ということで、我々としては、こういう方々に幅広く、オリンピック・パラリンピックの経験をしていただく、参画していただく。それがまた教育活動にもなるんだろうということで、現在どういう形でこういう方々に参加していただけるかということを検討中でございます。

ということで、今日いただいた御意見も非常に貴重な御意見だと思いますので、そういうことを参考にさせていただきながら、いわゆる我々の大会ボランティアとは別の枠組みで、こういう方に参加していただくようなことを考えて、発表したいと思っております。ということです。

以上でございます。

○坂牧局長 チケットの件に関して、マーケティング局のほうから御説明させていただきます。

実は、チケットに関しては、この間のV2予算で820億円という、物すごい金額を売らなければいけませんで、枚数にすると1,000万枚ぐらいの枚数をさばくということになるんですけれども。今日お出しした情報は、あまりにも少ないんですが、今後このチケットをどういうふうに売っていくかということに関しては、ぜひ、またこの場で、まあ次回になるのかどうかわかりませんが、皆様方のいろんな御意見をいただきながらやっていきたいと思っております。

今も結城委員のほうから、みんなのチケットの話とか、齋藤さんのほうから地方優先販売期間のようなお話とか、やはり、いろいろな、その会場周辺の方々にどういうふうにチケットを、今までいろんなイベントで渡してきたよみたいな経験値であるとか、いろんな会場にいる中で、あと、子どもたちをどういうふうに招いていくかとか、さまざまな関係者に対して、どう巻き込んでいくかという話と、あと、オリンピックの特性として、世界中の206以上のNOCの方々に、ある程度、時間をかけて、優先的にチケットを売っていくというようなことがあったりとか、この辺りの販売の非常に難しい特徴がございますので、

またぜひ、そこを御相談させていただきながらというふうに思っております。

あとそれと、昨今のオリンピックは、ほぼほぼ全てインターネット上での販売ということになっております。そのためにサインアップキャンペーンというのをやります。つまり、実際の発売のときにネット上でチケットを買える方々に事前に登録していただくということをしておりますが、これがロンドンのときには、事前の登録が200万を超えていたということがございます。逆に言うと、リオはその3分の1ぐらいしか集まらなくて販売に苦慮したみたいなことがありまして。

我々、この大会も、事前のオリンピック、チケットに関心があるという方々に事前登録していただきたいと思っておりますが、これもキャンペーンであるとか、事前のPRであるとか、そういったことは非常に大事になってきます、周知徹底ということが大事になってきますので、その辺りもメディアの皆様と、いかに連携できるかということが重要だと思っておりますので。まだまだ詳細、まだ半年ぐらいかかって決めていきますけれども、そのタイミングで、いろんな形で御意見等いただければと思っております。

○小林局長 私のほうから、2点ほど申し上げます。

まず、結城委員のほうから御指摘のありました、マスコットが決まったときに、選ばれなかったマスコットを選択した子どもたちにとっても、いい形で最終的なものが受け入れられるような形にできるようにという御指摘、大変重要な点だと思っております。

私どもも内部で最終的に発表する際に、少し検討をしておりますが、いただいた御示唆も受けて、どういう工夫ができるか考えていきたいと思えます。

それから、同じくマスコットの関係で、安藤委員のほうから、ちょっと情報が十分前広でないという御指摘をいただきました。その点についてはできるだけいろいろなことを早目早目にお伝えしていけるようにしたいと思えます。

いろんな工夫をしていこうとする中で、どうしても直前までなかなか調整がつかずに、十分、早目に外に出していけないというところがございますけど、そこはなるべく計画的にやっていけるようにしたいと思っております。

マスコットの発表につきましても、今まさにちょっと頭を悩ませながらやっているところでございます。やはり、最初の発表の際もそうですけれども、小学生に投票してもらったという観点から、その小学校がその結果を見て、どう反応するかというところが十分、出せるような形にしたいと思っております。

そうすると、その小学生の前でどういう形でできるのか。学校のスケジュールの関係で

すと、まあお昼ぐらいがいいのかなと思いますけれども、それが本当にできるのかとか、それが最終的には実際に本当に報道との関係で、いいタイミングなのかというのがあるのですが、基本的にはそうした子どもたちの目線を中心にしながら、最終的にどういうことが可能なのか、今まさに模索中でございます。その辺りが決まり次第、なるべく早く御案内をかけられるようにしていきたいというふうに思っております。

また、ONE TEAM PROJECTに関しまして、いろいろ御指摘をいただきまして、ありがとうございます。私どもも非常に短い予告編をつくって見ていただけるようにしたり、やはり有名な方々をお願いしていますので、御自分のアカウントでつぶやいていただいて、そこを中心にまた広がっていくようにとか、いろいろと工夫はしているつもりなのですが、まだまだ足りないところがあると思いますので、いろいろとさらに工夫をしてみたいと思います。

ありがとうございました。

○中村CFO ありがとうございました。

あと、佐野委員のアンブッシュ、これはなかなか難しいんですけれども、もしフォローがあったら言ってください。幾つかあると思います。要は、あまり一足飛びにアンブッシュかどうかというよりも、やっぱり組織委員会だけでカバーできるところと、できないところもあるので、そういったところをどういうふうに、いろんな人に関わってもらえるのが大事だと思いました。

ちょっと文脈違うのかもしれませんが、同じくおっしゃっていた、例えば、ごみ拾いなんかは、地元の自治体の方と連携して、小学校に声をかけていただいて、それはその自治体の方が声がけをするごみ拾いなんだけど、大会にも実は関係しているんだよねというような理屈もできると思いますし。商工会ともいろんな形で今、連携をとって一緒に盛り上げようと思っています。

最後の最後、やっぱりアンブッシュかどうかといったときには、例えば、内閣官房で「beyond」というマークをおつくりいただいていますので、そういったところで2020大会との連携を実感してもらおうとか、何かいろいろやり方はあるのかなと思っています。要は、あまり組織委員会だけで囲い込むと限界が出てきてしまうので、なるべく多くの方のお力をかりるのがいいのではないかと考えています。

あと、マスコットの発表方法は、結城委員の御示唆で、勝ち負けのところは非常にあれでしたね、ゴールが終わった後に、敗者が勝者をたたえるところがオリパラのすごくいい

ところですので、それがうまくマスコットのときも、うまい形でできるかどうかということですね。

小林局長からもありましたけれども、子どもが決めたので、いろいろ大人の事情はあるのかもしれませんが、大人の事情は最低限我慢していただいて、基本的にどうしたら子どもが喜んでいただけるかという観点から考えていくのだ大事だというふうに思っています。

ありがとうございました。

○日枝委員長 ありがとうございました。

積極的な御意見ありがとうございます。

それでは、今日の会合はこれで終わりたいと思いますが。第1回のこの会合を振り返ってみますと、まさに具体的なオリンピックが近づいてきたなということを思います。スタートのときは、事務局は大変だったと思います、いろいろ。いろいろは言いませんけれども、ここまで来たこと、本当に御努力に感謝をしたいと思います。

それでは、最後に事務局から今後のスケジュールについてお願いします。

○小林部長 企画制作部の小林でございます。

本日は、非常にたくさんの意見をありがとうございました。私どもとしましては、いただいた意見を実際のプログラムにどう反映していけるかという視点で、中でしっかりと検討を進めてまいりたいと思います。

また、改めまして、ポスター選考への御協力ありがとうございました。ほとんど投票いただいておりますが、まだの方につきましては、またお願いできればというふうに思います。

なお、集計の結果、得票数の同点作品があった場合ですけれども、こちらのほうの決定に関しては、日枝委員長に一任させていただければというふうに思っております。

それから、最後に2点御連絡ですけれども。

まず、今日の資料と議事録につきましては、後日、組織委員会のホームページで公開をさせていただきますので、よろしく願いいたします。

あと、次回開催についてですけれども、日程これから決めますけれども、来年度を予定しております。別途また御連絡させていただきますので、よろしく願いいたします。

それでは、今後とも委員会の運営に御協力をよろしく願いいたします。

今日はありがとうございました。

○日枝委員長 ありがとうございました。

それでは、これで8回目のメディア委員会を終わらせていただきます。
相当、降っておりますので、足元にお気をつけください。